

環白山麓帯にみられるニホンザルにかかわる地形と地名の伝承 —境とサル民俗への接近—

広瀬 鎮 名古屋学院大学
山本重孝 吉野亀寿会

ON THE FOLK-LORE OF LAY OF LAND AND LAND-NAME, CONNECTED WITH MONKEY IN HAKUSAN MOUNTAIN FOOT REGION IN ISHIKAWA PREFECTURE —APPROACHING ASPECTS OF LORE OF BOUNDARY AND MONKEY—

Shizumu HIROSE, Nagoya Gakuin University
Sigetaka YAMAMOTO, Yoshinodani-mura

はじめに—村民の自然認識への接近

1991年9月7日上吉野地区在住の小林^{ツズ}伝氏79才(インフォーマントK)に山本重孝氏とお会いした。下吉野と上吉野両地域に暮らす人びとの環境への思い、とくに地形や自然、そこに住む生きものたちへの伝統的な態度などをめぐり、昔から継承された思いなどを丹念にうかがった。明治45年2月28日生れのインフォーマントKは若い頃(幼少期)は、村外に暮らしていたが、後年故郷に住みついで今日にいたっているのであるが、両地区の地形のちがいによる生業差が村人の性格をつくりあげたと考えている。上吉野に子供の頃あった山鳥のことを記憶しており、上吉野地区を生活の成りたち難い環境として認識していた。

上吉野地区と下吉野地区における地区住民の生活観については別稿にてとりあげたいと考えているが、“山はやっかいなもの”との言葉からはじまった生活に係わる環境としての山・川に話題がおよんだ時“サルトビイワ”の地名が問題となった。今日では、この手取川の兩岸の迫まる地帯はカヌー下りの名所となっている。インフォーマントKによれば、同所はカワウソの生息地であったし、人びともしばしばひきこまれる悪所でもあった。手取川の氾濫もまた強烈な記憶のうちにあったのである。

本論では、村と村の境域は、住民にとってどのように理解され、古くからの伝承が継承され、地形認識としても成り立っているかを以下に明らかにするものである。

地形と地名の民俗を追って

自然に、文化に触れ合う里として石川県石川郡吉野谷村は、地域開発と山村文化振興の目標にたった、観光へのキャッチ・フレーズ、「自然、文化との出逢い」を力強くうたいあげている(吉野谷村, 1989)。今や、自然は地域評価に深くかかわる「財」として登場しはじめている。手取峡谷のせせらぎが心に響くとうたいあげる吉野谷村工芸の里は、吉野谷村の北からの文化流通の最前線である。本論は、吉野谷村を中心とした地域内に継承され記録化された地形認識に係わる住民意識を、ニホンザルに係わる地名継承をもとに、収録し、考察を進めるものである。

今日、民俗調査といえは、住民生活の一切に係わる生活文化の様式を文化としてとらえた認識の世

界の全てがとりあげられてはきているのであるが、いまだ、自然と係わり、自然観をもとにした自然史のもつ価値のうえに立った考察は乏しい現状である。

幸い、白山麓地帯の地名についての調査研究は、千葉徳爾氏(明治大学)によってすでに報告調査がなされているのであるが(千葉, 1974・1975)、岩田憲二氏(白山自然保護センター)による、山村文化の実践者としての伊藤常次郎氏紹介にみられるごとく、地形認識にさらに加えて「土は親様なり」とする環境観の一端が収録されている点は、重要である(岩田, 1991)。

吉野谷村在住の山本重孝氏は、亀寿会メンバーとの共同調査によって、吉野谷村周辺の地名をめぐっての聞き取り調査をおこない、そのまとめを公表しているのであるが、近年同会メンバーと共に、下吉野地区を中心とした周辺地域のとくに村落ごとの境界点に

ついての調査をはじめている(吉野亀寿会, 1987)。これらの調査の一部は、「白山麓の集落の境について」として報告されている(山本, 1991)。

本論ではあらたに山本重孝氏によって収録したサル名の地点についての資料を加え報告をおこなうものである。筆者も1991年9月の時点において、吉野谷村、河内村両地区をめぐり現環境と、伝承地点との比較考察を試み、考現学考察をふまえた、観察の上になつ、環境評価を試みて今にいたっている。とくにとりあげたいのは、吉野谷村と河内村の村境である。これはしばしば、地区住民の伝承化した昔話に登場する環境であるからでもあるが、現在、聞き取りによって何らかの伝承残留をみた地点の映像による記録化がはじまっている。

さて、白山麓の村境について、山本重孝氏他と共に調査、聞き取りを試みてみると、既に同氏が述べられているごとく、必要以上の土地をもち難い地区住民の長年にわたる支配者に対する対応としての土地認識と係わることは認めざるをえないのである。瀬波の前多正信氏(74才)により伝えられた棒作りの雪持境の伝承もその間の事情をものがたっている。これは藩政初期、山境に係わる山争い時、十村、肝煎りの集まる山論できまったという。村落ごとの地域エゴが、語られていて、住民にとっての村境地区認識というものは、生活権をめぐる争点上の地点であった場合が多いと考えられるのである。



図1 吉野谷村全域図

村境および集落周辺に係わる環境認識

すでにのべたごとく地域住民についての境界認識はきわめて生活維持と係わったのであるが、今日のごとく、広域感覚で、地区における確執を論じることが乏しかったと思われる。現在では、例えば、吉野谷村と尾口村を中心に野生ニホンザルによる猿害が発生しても、その損失は行政への保障として事件の解決への要請がなされてくる。野生鳥獣と人間とのテリトリーをめぐる論争はひきつづき問題化がすすめられる。住民にとっての地区境界は、生活の様式としての文化と無関係ではなく、農・林産生業をめぐることは、たえず境は生活意識の根底に存在しつづけているのである。近年ニホンザルと村域接近をめぐるカキの木とサルの関係調査がなされて、野生ニホンザルの行動の一端が解明されてきた。集落毎にカキの木の多い地域はニホンザルの滞在日数も多いことがわかってきたのである(野崎, 1991)。

筆者は、1990年9月1日に吉野谷村と河内村の村境調査を試みた。土橋から始まるスノーセットの入口に吉野谷村標識があり、河内村字吉岡の八幡神社の近くの国道157号線に河内村という標識がたっている。赤文字の目立つ看板といえよう(図-2)。

地籍の上では吉野谷村であるが、土橋以北の土地は吉岡が実質上もつようになったと、山本重孝氏は、この村境の特色を明らかにしている。

そこには云いつたえが残されていた。昔、村境を定める頃には、お上の年貢が高いこと、道普請や行路病人、死人の世話や始末をせねばならず必要以上の土地をもたぬようにしたことと係わっていると考えられる。両村(吉野谷村と河内村)の標識は200mずれているのであるが、かつて吉野と吉岡の村境は八幡神社の近くであったが、明治7年に土橋以北を吉岡が吉野から買い取ったのであるが、この村境をめぐる、

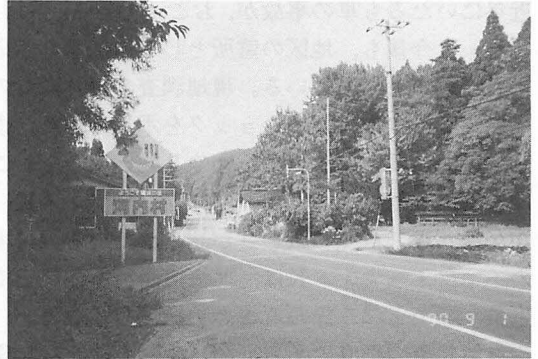


図2 吉野谷村と河内村の村境
(山本重孝氏撮影)

吉岡地区の宮道德太郎氏(故人)が語った昔話は、村境ぎめの際の両地区民のとった行動や、人々の地域の性格差にもふれて興味ふかいものがある。八幡神社が、何らかの形で、両村住民の納得しえた境界となったものとする。だが、上吉野の山下たけ(81才)の語る村境伝承は、むしろ吉岡地区と吉野地区の山林をめぐる対立点がうかがえる。両地区の住民が出合った所を境としたのではなくむしろ、金銭的解決がその背後にあったと伝承は示唆するのである。

キツネや、オオカミの出現と係わる街道ぞいの景観も、この地を知る多くのインフォーマントの言により、もはや暗く、しめった所ではない。インフォーマントの少年期には、川に沿った暗い森の道が残されていた。山の子が山の子ではなくなったと真野哲三氏(鶴来町)は学校教育の立場から今日の青少年層の急速な変化についてのべている。地域社会の消滅は交通革命により、村境のもつ社会的、生活文化の特色を一息に破壊し去ったと考えられるのである。野生動物との地形をふくむ自然環境の構造による住民との位置空間をめぐる地形、地名の認識はサル名をとりあげるにより一層明らかとなるのである。とくに、吉野と河内の境をめぐる伝承聞き取りにおいて山本重孝氏は、きわめて重要な、住民独自の伝承に接しているのがある。それは、吉岡地区中野孝次郎(72才)からのものである。以下にのべる。

“ほそ越の土橋から、上の尾根伝いを境とすれば自然なのに、こんなにかたよったのにはこんな訳がある。明日村境を定めることになったので、吉岡の肝煎りは上の段（今の道）は山と荒地地で出費ばかりでなんにもならぬ。下の段は畠が多いし、河原は川木が沢山とれるから下の段を確保しようと下の段を進んで土橋の下まで来ていた。吉野の肝煎りは上の段を行き、お堂様の前で待っていたので、そこが境になった。”この云い伝えのもとに同地帯のをみると、河原地帯に関しては、中野孝次郎氏の云うことはよく理解できるのである。上の段が、“出費ばかり”というのは、道に係わる補修や、通行人をめぐる諸扱い上の負担と考えらるが定かではない。

以上吉野亀寿会による吉野谷村地区の地形や地名にまつわる昔話の収録が進められており、現在の環境との比較を試みる事が可能である。しかしながら、道路整備の発達した今日においてすら、地形のもつ自然条件は、現在人の社会生活と係わっており、土橋の下の三ヶ用水の取り入れにから50mほどの間のくづれおちてぬけた所が「けおとし」とよばれ、好感のもたれぬ所となっており、近年にいたるも車の事故が、おこっている。「けおとし」は今後も、地区の難所としての伝承を伝えて行くものと考えている。現地調査の折り同行の黒川みよ(68)さんは強いショックを示していた。また、昭和初期の道と村境をめぐり聞き取りをおこなった上吉野村小林伝氏（インフォーマントK）によっても吉野から鶴来への道でのいくつかの難所が記憶され、自然の厳しさが語られている。村境の調査は、村落の生活史の解明でもある。上吉野野のインフォーマントKは、北海道生活を体験しているが、上吉野からの村民の流出が、地域の生産、生業、経済と深く係わることを指摘していたが、村境への関心が高かった。地区住民にとっての地形や自然認識の根底にあるものは生活と係わった環境への対応そのものであるといえるのである。

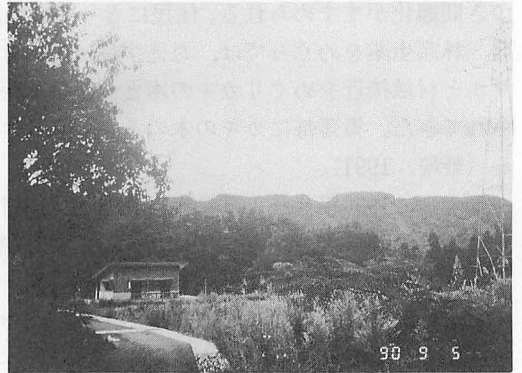


図3 悪清水の地より手取川へ千枚田を経て

白山麓に現れた猿名の地

環白山麓帯の民俗調査を始めてから20年以上を経過した。サルを中心とした動物と自然人との人文学研究の成果は、白山自然保護センター報告書に記録されているのであるが、今回、山本重孝氏より、白山麓にみられたサル名の地についての調査報告をえた。すべてインフォーマントによる口述記録であり、資料価値の高いものと考えている。以下にサルの名称をもつ地名をあげ、若干の考察を加えてみよう。

1. さるかべ＝猿壁

◎白峰村市ノ瀬から別当出合へ、白山の登山道（約6km）を2.5km登った所に、巾150mもある大絶壁があり、昔から危険な登山道であったが立派な車道になり登山者にとっては大変便利になったが、この工事に当たられた会社社長さんやブルの仕事をしていた運転手が事故死されたことは悼ましい事である。この壁のあたりを猿壁と呼んでいる（白峰 永井竹男 63才）。

◎危険な絶壁なのでサルもよりつけなかったのでさるかべという名がついた（永井竹男）。

全国的にこのような急峻な場所をさしてサルも近づけないところとして名づけられたとされている

が、ニホンザルは、しばしばこのような急な崖にでかけて行く。人をさけたニホンザルたちの休息の場所であったのでむしろサルがしばしばみかけられる場所でもあり、そのことと係わってつけられたとも考えられるのであるが、地名由来に動物としてのサル名がつけられている場合には、とくにサルは、姿・色・形・行動・色・匂い・声などのさまざまなメッセージを日本人が意識して、そのイメージをとりあげて地名に付したものと考えられるのである。

2. さるぶせ＝猿伏せ

◎白峰村桑島には大嵐谷、小嵐谷という大きな谷川がある。この谷の奥にはサルの群れが住んでいて、サルは相手が強いかわ弱いかを見極めて、強い男が通ってもいたずらをしないが、弱い女が通るとめとにしていじめることがよくあった。出作りの女の人が、一人通ると沢山サルが集まってきて、山道の所に小枝を踏みつけて通れなくしたので困ったという話が残っている（桑島 酒井芳永 80才）。

地名伝承の語りの中でもサルが登場すると、サル自体の生態・行動に係わったものが多く出現する。まさしくニホンザルの群れ、そして集団行動があるていど見やぶられている観があるが、インフォーマントに伝えられている云い伝えとしてのサルが人間の男と女とを区別することは、全国的にひろがっているサルの行動のとらえ方の一つである。近年ニホンザルが里山にあらわれ、婦女子を噛む（熊本県）という情報に接することがあるが、「さるぶせ」はサルがまちぶせをする場所として、ニホンザルの遊牧や、好んで採食する場所などの特定がなされている。

3. さるばな＝猿鼻

◎中宮のブナオ山と尾添の次郎兵衛山があたかもサルの鼻を突き合わせるような狭小な土地である。

◎サル・クマ・カモシカなどはここまでしかでてこなず、人間とサルの居住地の境界線ということからさるばなと名付けたと云われている（尾添 林源常 61才）。

尾口村尾添の山中にあり、昭和59年北陸電力(KK)尾添発電所が建設された場所(山本)、インフォーマントが“ヒトとサルの居住地境界”ととらえている所が、昔からの伝承であれ、現実の環境状態であれ、とくに注目されるのであるが、狭小な土地として山と山との迫まる地形がさるばなと呼ばれているのである。

4. さるがじょうど＝猿ヶ浄土

◎人間の登ることの出来ない岩山であるので、サルやカモシカが安心して住める山だから、猿ヶ浄土と云う名がついていた（中宮 故・外 一次）。

インフォーマントとは生前しばしばお会いしたが、蛇谷苑地でのニホンザルの管理者としてニホンザルの生態をよく知りぬいていた。しかも生息地適応や、サルの日常行動について、その活動の変化、とくに人間との接触によってひきおこされた微妙な行動差を同インフォーマントは語っていた。例えば、“サルは煙りをこわがらなくなった”という口承は、ニホンザル集団の餌付け後にひきおこされた人間接触によってもたらされた行動変化であって、出作りを行っていた時代に、サルたちはたえず緊張していたのであり、これが、すっかり人への警戒心を失なって行った近年の野生ニホンザルの生態行動を見ぬいての言葉であると考えている。

◎この一帯には、黒鉛（火薬の原料）や金鉱があるので、前田藩では幕府にわからぬようにと、とめ山にしたので、人間が入れないのでサルたちが安心して住めるのでこの名がついた（金沢 故糸田 敬仁）。

生前インフォーマントからはハクサンザルについての知見の多くを伺い、多くの口承収録がなされているのであるが、ヤマノオンジイと呼ばれた同インフォーマントもやはり「サルが安心してすめる」という地域認識を強く抱いている。「浄土」としてのサルの聖域をみとめるこの地名には、人間と野生動物とのすみわけを意識する思いが、その根底にあり、白山麓の住民の抱いた、自然および野生動物に対する自然観、動物観と深い係わりをもっていると考えている。

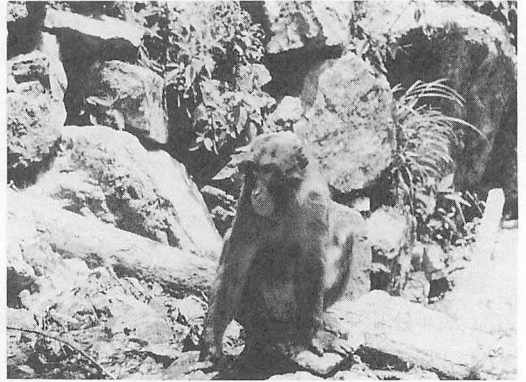


図4 「サルは煙りをさわらなくなった。蛇谷のサルは雷がきらいやった」
外次さんはよく語ってくれた。

5. さるとび=猿飛

◎手取川の両岸壁が最もせままっている所で、

サルの群れが兩岸を飛んで遊んでいたもので、さるとびという名がついた(上吉野 故・中山市太郎)。

◎数年前から手取峡谷ボート下りが鳥越村商工会青年部で始められた。ボートで下っていると、水面から10mほどのサルトビの下の吉野側に大きなサル(ゴリラ?)の彫刻のように見える所が発見された(下吉谷 野端健造 62才)。

吉野谷村上吉野のこの下と鳥越村上吉谷の駿馬川尻(綿ヶ滝)の間を流れる。手取川の両岸が最もせまっている所(山本)ということからもサルがとびながらわたっているせまい場所、このような特色のある地形が野生動物にとっての移動の場所となる場合は多く観察されているが、あらたにゴリラ岩が発見されているところから、今後この地名が、変更される可能性があるが、インフォーマントはサルがとんで遊んでいたという地形に愛着を感じていたと考えられる。

6. さるかがみ=猿鏡

◎私の家の後の川底が大きくよどんで池のようになっており、その上に大きな枯松があり、月夜には鏡のように波一つない池の面に月の光をおとしていた。ある満月の夜、月の光が金色に光って見えた。この松の木の枝に遊んでいたサルたちが、あれは人間共がほしがる金の玉に違いない。あれをとって人間共の鼻をあかしてやろうと相談して、猿ぐさりをして水面から金の玉を取ろうということになった。数10匹の猿ぐさりの一番下のサルが、うんと力を入れて、水面に手を入れようとすると、一番上のサルの手が枝から離れて、バタン、バタンと水面に落ちて死んでしまった。後には鏡のような水面に何事もなかったことから猿鏡という名がついた。

この辺り、手取川岸が急峻でその岩壁を歩くにはサルのような敏捷な者でも、かがんで歩いたというので猿屈みという名がついた(釜清水 鈴木勝也 88才)。

インフォーマントからは、直接この地域や、ライフ・ヒストリーをめぐり多くの体験談を聞き、録音収録がなされているが、自然知識はきわめて豊富である。インフォーマントの経歴にみられる発電事業との係わりにみられる川および水、生活に係わった自然との対話のうちに、このような口承が受けつがれていたものと考えられるが、すでに猿鏡伝説は山本重孝氏他によって記録され、公開されているのであるが、古くからの古伝承「猿候鞠月」そして「猿橋」伝承の複合された「猿鏡」は文芸の世界につらなる伝承として今もなお継承され、同地息の黄門橋は下吉野地区の村指定の名勝となっている。サル名の地のなかには今日名勝指定がなされているものは含まれていないが、地名のもつ民俗文化性については、さらに留意されねばならないものと考えている。なおインフォーマントからの

地域の生活様式にかかわる文化伝承は、いずれ稿を改めて報告したい。

7. サラ(ル)バンバ=猿馬場

◎仏師ヶ野の後ろの山の杉林の上にちょっと平になった所がある。昔サルがそのあたりで遊んでいたのこんな名がついたのではなからうか(仏師ヶ野 山本きく 66才)。

インフォーマントは、66才であるが、サルの生息地と係わった地名として特定の場所が指摘されている。この点は、ニホンザルの古分布と生態を考察する上での情報資料ともなる。筆者はこれまで白山麓地区で、長年にわたってニホンザルと日本人の人獣交渉にわたる民俗、アニマル・ロアを追求してきているが、サルの生息地や、サルの移動行動とむすびついた地形の猿名称化については、しばしば聞くことが多かったが、明確に「後の山の杉林の上の平地」とした指定には出合うことがなかった。またサルをサラと呼ぶ点は重要である。

8. サルガハナ=猿ヶ鼻

◎三ツ屋野の方から三ツ屋野と左隣の山境の方を見ると山と山とが鼻を突き合わせているように見える所がある。それでこんな名がついたと思える(三ツ屋野 北はる 72才)。

インフォーマント在住の三ツ屋野地区の聞き取りおよびアンケート調査は1988年以降進められたのであるが、アンケートでは、「おぼえているまわりの自然」も調査項目に入っており、家のまわりの山・川・畠地・丘の名前、そして家から見える一番高い山の名前などがあげられた。三ツ屋野地区住民にとっての強い関心は川そのものにあつたのであるが、インフォーマントは、地名伝承中もっとも地形そのものと係わるサル名の場所を記憶していたのである。

9. さるほとけ=猿仏

◎河内村江津のこもかけ谷の入口に年老いた猿が六字の名号を抱いて死んでいたことからついた。越中道林寺の寺宝になって大切に保存されている(江津 森なお 83才)。

インフォーマントの云う寺宝調査を試みてはいないのであるが、サルと仏縁に係わる故事は全国各地にみられる。地域社会と仏教普及その信仰圏のひろがりを示すものとして、サルそのものの取りあつかわれ方にさらに注目されねばならないと考える。筆者は1991年1月20日河内村公民館にて山岸善二教育長、田中博氏その他のインフォーマントからこの伝承に接した。

10. さるくら=猿倉

◎河内村下折、倉谷のびよぶのうら、急峻な岩山で断崖が上からかぶさっていてクマ・サル・カモシカしか通れぬ所である。春先になるとクマとりに行く(下折 村口善作 77才)。

下折地区は大正期の表層なだれによる雪害をこうむった地域であり、今日にサルまでがなだれにやられたことが伝えられているが、急な岩山、断崖の上からかぶさる地帯が倉とよばれ、サルしか通れない地点として「さるくら」の名がつけられている点は、白山麓にみられるサル名の地名が、野生動物の生息地として人びとの接近をはばんでいた地形として印象づけられこれは、鼻・壁・倉と地形そのものを意味する言葉とむすびついているのである。山本重孝氏はさらに、同様な地名を収録した。この例はサルの姿形にみえるとした点で、これまでの名称化とはことなっている。

11. さるばな=猿鼻・猿端

◎河内村内尾スキー場の尾根の奥、大きな岩山が上から、突き出て覆いかぶさっている。サルの鼻

のように見えることから、猿鼻、断崖のはずれにあたるから猿端と云う名がついたのではなかろうか（内尾 内藤長松 75才）。

インフォーマントとは、10余年のうちに数回以上の出合を得て、内尾地区の民俗・村落の近代化、文化伝承の保存等にわたって其他地区住民の方々と共に接してきているのであるが、急速に変化しつつある山村社会と環境変化、生活文化の変容を身をもって体験している。1991年7月30・31日愛知県南設楽郡鳳来町下吉田のふるさと学研グループとの山村の変容と消滅をめぐる談話会において、地区住民の生活保障と近代化、そして生活様式の変容、多くが語られた(図-5)。別稿にて、「河内村内尾の人びとの環境観の展開—民俗文化の形成—」としてとりあげる予定であるが、インフォーマントは、幼少期に“サル”と呼ばれたことを良く覚えている。

サルの鼻にみえる地形もインフォーマント個人の思い入れとのみみることはできない。サルの姿にみえる自然石や、自然の景観の一部が、日本列島各地に存在しているのである。



図5 吉野谷亀寿会交流会
下吉野生活改善センターにて

V おわりに—白山麓伝承の比較研究法

以上本論では、地域住民の地形認識や、サル名にこだわった名称の付与された地域や場所に係わる伝承をとりあげて考察したが、白山麓全域にわたっては、いまだ収録し切っていないことから、収録は今後もすすめられるが、今回とりあげたサル名の伝承は、61才から82才におよぶ高齢インフォーマントからの収録であり、白峰、桑島、尾添、中宮、上吉野、下吉野、釜清水、仏師ヶ野、三ツ屋野、江津、下折、内尾12地域におよんでいる。それらのいずれの地域も近年の山村開発、現代化、そして村おこし文化創造と、継承と係わって自然環境の大巾な変化がもたらされているのであり、とくに、交通網の発達、リゾート化、観光資源化開発と共に社会の構造変化へも係わっているのである。

地名伝承を継承したこれらインフォーマントの抱く自然観や、自然認識の実態を正確に記録し、彼らの認識としての自然を、地域社会の文化としてとらえねばならないと考えている。1991年7月におこなわれた吉野亀寿会の方々からの聞き取り、9月の鳳来町のふるさと学研グループとの交流会によって、それぞれの地区をことなった環境でありながら、山村のもつ共通の宿命ともいえる現代化に関し、生活観の多岐にわたる認識の相互交流が行われたことは意義ふかい。今後、地区の生活自体を変容せしめる文化交流の具体的なあらわれと形成される新しい認識とを比較することになると考えている。

本論は、山本重孝氏の調査収録地名伝承をもとに諸考察を加えたものであるが、多くのインフォーマントの方々のお力添えをえた。各町村ごとの民俗調査に当って御協力ねがった町村役場の職員の方々、とくに吉野谷村、河内村教育委員会他の方々、あわせて、下吉野亀寿会の方々に深い感謝を呈したいと思います。また、本論は、白山自然保護センターの調査研究委員会研究費の協力を得たことを記して謝意を表すものである。

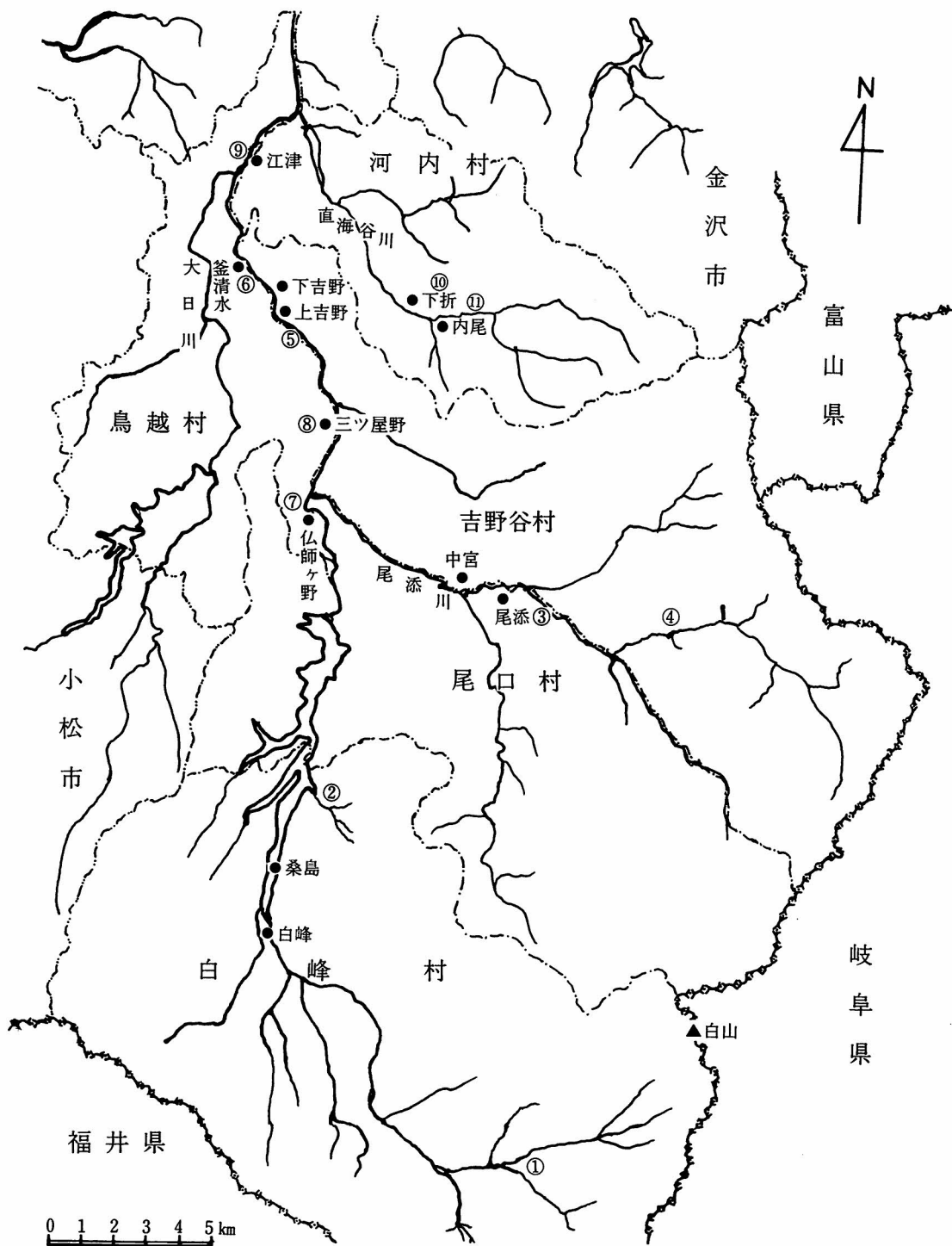


図6 白山麓五村地図

文 献

- 千葉徳爾 (1974) 白山麓吉野谷村における小地名の採集について, 石川県白山自然保護センター研究報告第1集, 18-20
- 千葉徳爾 (1975) 白峰村の小地名一特に出作り地名について, 石川県白山自然保護センター研究報告第2集, 143-144
- 広瀬 鎮 (1981) 中宮(石川県, 吉野谷村)におけるニホンザル伝承にみられる自然観の変遷, 石川県白山自然保護センター研究報告第7集, 41-52.
- 広瀬 鎮 (1984) ニホンザル伝承と白山麓吉野谷村下吉野にみられた地域住民間の自然動物観, 石川県白山自然保護センター研究報告第11集, 69-77.
- 広瀬 鎮 (1986) 石川県石川郡鳥越村にみられる哺乳動物と住民生活の自然史-左礫のうびと-, 石川県白山自然保護センター研究報告第13集, 79-84.
- 広瀬 鎮 (1988) 石川県石川郡手取川流域にみられる住民の自然観(Ⅰ), 石川県白山自然保護センター研究報告第15集, 117-128.
- 広瀬 鎮 (1987) 中部山村社会における猿の民俗(1)-白山麓白峰村および西濃山村における薬用伝承の地域性-, 名古屋学院大学論集Vol.23, No.2, 37-59.
- 広瀬 鎮 (1987) 中部山村社会における猿の民俗(2)-環白山麓帯にみられる気象予知俚諺に係わる動物伝承と地域住民の自然観-, 名古屋学院大学論集Vol.23, No.4, 41-77.
- 広瀬 鎮 (1988) 中部山村社会における猿の民俗(3)-白山麓鳥越村にみられる自然観と環境認識(下吉野, 上吉野, 三ツ屋野, 河原山)-, 名古屋学院大学論集Vol.25, No.1, 1-44.
- 広瀬 鎮 (1988) 中部山村社会における猿の民俗(4)-白山麓鳥越村近代化にともなう住民の自然観の変化-, 名古屋学院大学研究年報, 319-360.
- 広瀬 鎮・藤田喜作 (1990) 環白山麓帯の生活文化におけるアニマル・ロアの地域比較, 石川県白山自然保護センター研究報告第17集, 39-45.
- 吉野谷村物語編集委員会 (1984) 吉野谷村物語, 11-16.
- 吉野亀寿会 (1987) 昭和62年度地名の調査確認と地名の由緒・伝承の収録, 下吉野地区, 1-68.
- 吉野谷村役場 (1989) 自然の素晴らしさに出逢う YOSHINODANI, 1-6.
- 吉野谷村役場総務課編 (1989) 吉野谷村資料編, 1-22.
- 岩田憲二 (1991) 山村文化の実践者伊藤常次郎さん, はくさん第19巻第1号, 8-9.
- 山本重孝 (1991) 白山麓の集落の境について, はくさん第18巻第3号, 5-7.
- 野崎英吉 (1991) ニホンザルの個体管理調査, はくさん第19巻第1号, 12-13.

Summary

Authors visited villages of Hakusan Mountain Foot Region and could hear of many life experiences of informants who had worked in Nature and severe environment.

We found interesting memories of land name of monkey with lores. We analyzingly mentioned characteristics recognitions of villagers and cognitive informations of informants life history. How the people recognized their own space and boundary place in their own living region was a fresh subject of our field-works.